從三位兵部卿兼左右京大夫藤原朝臣萬里　六首【萬里一本作麻呂】

五言暮春於弟園池置酒　竝序

僕聖代之狂生耳。直以風月爲情。魚鳥爲翫。貪名狗利。未適冲襟。對酒當歌。是諧私願。乘良節之已暮。尋昆弟之芳筵。一曲一盃。盡懽情於此地。或吟或詠。縱逸氣於高天。千歲之間。嵇康我友。一醉之飲。伯倫吾師。不慮軒冕之榮身。徒知泉石之樂性。於是絃歌送奏。蘭蕙同欣。宇宙荒茫。煙霞蕩而滿目。園池照灼。桃李笑而成蹊。既而日落庭清。樽傾人醉。陶然不知老之將至也。夫登高能賦。卽是大夫之才。體物緣情。豈非今日之事。宜裁四韻各述所懷云爾。

萬里一に麿に作る、史の第四子、智辨多能、善く文を屬る。聖代之狂生、在野の君子なれば狂生と用ひるも可。從三位兵部卿と云ふ、國家の樞機に關する人としては、大に不可なり。日本の月卿雲客は動もすれば、自家の身分を忘れ、却て是れ謙遜の辭と思惟せり。誤まれり誤まれり。貪名狗利、是れは小人の事。冲襟に適はざる甚だ宜し。狗は徇の俗字とす。「史記伯夷傳」に貪夫徇ㇾ財。烈士徇ㇾ名。「モトム」と訓み、又「シタガフ」の訓もあり。對酒當歌、此の四字は魏の曹操の句。良節は三月。嵇康の事は前に辨ぜり。酒を好むを以て我友なり。劉伯倫名は伶、晉の沛國の人。酒を縱にして放達、阮籍、嵇康、皆友なり。酒德頌を著はす、晉に仕へ建威將軍と爲る。軒冕は、卿大夫の車服、遂に貴顯の代名詞と爲る。從三位兵部卿、軒冕の極なり。蓋し貴顯の身であるなぞと少しも思はず、反して泉石の貴や賤の外に超自然の趣きあるを賞するが、我が本性に適するなり。蘭蕙は蘭の如き兄、蕙の如き弟。煙霞蕩、三月の春闌ならんとする景。而して、桃の如き客、李の如き賓、來て以て蹊を成す。古語に、桃李不ㇾ言。下自成ㇾ蹊。桃李は華實あり、桃李自身より人を招かず、招かざるも人至る。德の高き人、他を呼ばず、呼ばざれども、他自から至る。陶然は酒の酣なるなり。酒の闌にはあらず。登

高は九月にて三月にあらず、誤用したるなり。能賦は伯倫や嵇康の如き才人を指す。體物緑情、山なら山、水なら水、總て其の物に對して、而して我が詩情を緣ずるは、其れは今日、此の會の事であるなり。四韻は五言四十字の詩。又は七言五十六字の詩か。今は五言四韻詩なり。

城市元無レ好
林園賞有レ餘リ
彈琴中散カ地
下筆伯英カ書
天霽雲衣落チ
池明ニシテ桃錦舒ノブ
寄レ言ヲ禮法ノ士
知レ三我有ルコトヲ二麤疎一

無好は、好友無き意にはあらず、城市には賞すべき好き物が無きなり。林園、卽ち弟の園池は賞有餘なり。此に來て彈琴すれば卽ち中散が地位を占む。又字を書けば伯英が書の如く妙なり。中散は官名。嵇康、魏の宗室と婚し、中散大夫を拜す。世に嵇中散と稱す、是れなり。伯英は張伯英。後漢の徵士、世に草書の聖と稱せらる。而かも其の傳は詳ならず。天霽雲衣落、池明桃錦舒、此の十字は信に佳句なり。雲衣は雲の模樣を形容する。桃錦の字の如く、紅桃が色錦の如きなり。禮法士は、他の賓客を指せしならん。我麤疎、誤寫にあらずして原作が此の如くならば、「序」に於て狂生と自ら稱したる位なれば、行動が禮法に背くことあらん。其れを知て吳れとなり、知を許とせば或は可ならん。

五言過ニ神納言墟一

一旦辭レ榮去リ

千年奉諫ノ餘
松竹含ミ二春彩ヲ二
容暉寂舊墟ニ二
清夜琴樽罷ヤミ
傾門車馬疎ソナリ
普天皆帝國
吾歸遂ニ焉イヅクニユク如
君道誰レカ云レ易シト
臣義本自ラ難シ
奉シテレ規ヲ終ニ不レ用
歸去遂ニ辭ス官
放曠遊ヒ二嵇竹ニ二
沈吟シテ佩フ二梵蘭ヲ二
天閻若シ一タヒ啓ヒラカハ
將レ得二水魚歡ヲ二

神納言は大神朝臣高市麻呂なり。

墟は、遺墟、故墟なぞと成語して、古き跡なり。嘗て納言の住したる遺墟を過ぎて此の詩を作る。一旦と千年は對句のみ。神納言は壬申の亂に江兵（弘文帝の兵）と箸陵に戰ひ、遂に其の將盧井鯨の軍を破る。其の功を以て中納言を拜す。白鳳五年、天下大旱し民水利を爭ふ、高市卽ち己（をのれ）の水田を決して、四鄰の田に灌ぐ。俄かに雨大に降る。人以て報應と爲し。神納言と稱す。天武崩じ、持統に仕ふ。朱鳥六年三月將に伊勢阿胡行宮（アコノカリミヤ）に幸せんとす。高市上表諫めて曰く、王者は民をして農時を妨げざらしむ、是の月や蠶已に長じ、桑麥も亦將に熟す。民に餘暇有ること無し。今車駕出て遊ぶ、恐くは民を苦しむのみ。諫爭再次、而かも聽されず。仍ち闕下に詣り、冠を免（と）いて去る。此の二首納言の舊邸の荒涼なるを見て、悲歎

を發す。松や竹は春彩を含んで、生氣あるが如きも、而かも容暉は寂たり、主人在らず、琴樽何ぞ在らん。賓客來らず、車馬疎なる所以。諫容れられずして去る、固より臣が道なるも、普天の下皆王土なり、遂に斯躬を置くは其れ何れの處ぞや。不得已、嵇康の如く、放曠して竹林に遊ぶ、屈原の如く沈吟して以て楚蘭を佩ぶるのみ。【貞を守るの義。】幸にして天皇が臣節の正を認めらるゝあらば、是に始めて君臣水魚の懽情を得べしとなり。二首神納言を慰し、且天皇の聰なるを冀ふ所、臣義とし、詩旨として共に其の至誠を見る。

五言仲秋釋典

運冷時窮レシ蔡ニ
吾衰タルコトシク久歎スレ周
悲哉圖不レ出
逝矣水難レ留
玉俎風蘋薦
金罍月桂浮フ
天縱神化遠シ
萬代仰ニクフ芳猷ヲ

釋典は供物を神前に置き、以て孔子を祭る式。支那に於ては古代より行ふ。我が邦にては文武天皇の太寶元年、始めて之を行ひ、二月八月二次に行ふ。十哲を合祭す。是れ秋日の詩。運冷は孔子の生れし時、運が不幸にして陳と蔡との兩國の間、特に窮危せられたり。吾衰は孔子自ら歎じて言ふ、衰へずんば夢中に必ず周公を見ん。衰へたるが爲め、夢にだも周公の如き聖人を見ずと歎ぜられたり。悲哉圖不出、伏羲氏天下に王たり、龍馬圖トを負うて河より出づ。遂に其の文に則り、以て八卦を畫す。孔子の世、伏羲氏が如き世に聖あらざるを歎ずるなり。逝矣水難留、孔子川上に立て、水の流を見、門弟子に謂て曰く、逝く者斯の如く、晝

夜を舍てずと。歳月の匆匆たるを悲しむなり。玉俎風蘋蘋、金罍月桂浮、正しく今日釋典の祭を曰ふ。蘋はうきくさの一種、かたばみも、又はかつみ、淺水に生じ、四葉合して一葉を成す、田字形の如きものを眞と爲す。夏四瓣の白花を開く。「宋玉賦」に、夫風生二于地一。起二青蘋之末一とあり。『詩經』も、于以采レ蘋とありて、古來より祭奠に用ゆる物。蘋は草の名、今は獻の意味。罍は酒を盛る器。「陸贄賦」に、桂華不レ定。多因二蘋末之風一とあり。月桂はツマリ月影なり。月影が祭奠の酒器に浮ぶなり。天縱は「天ヨリユルス」なり。孔子は天縱の聖人、子罕のみ之を言はんや、天縱生知、不二從レ師學一。其の天縱の聖人も、神化は既に遠し。直接教を受る能はず、萬代の下、只芳猷を仰ぐのみ。猷は謀也、道也。芳猷は大道と解すべし。

此の篇、前半は夫子が事を敍し、後半は祭祀の事を敍す。通體響亮、題目と背かず。

五言遊二吉野川一

友非二干レ祿友一
賓是レ飡レ霞賓
浩歌臨二水智一
長嘯樂二山仁一
梁前招吟古
峽上簧聲新
琴樽猶未レ遊
明月照二河濱一

干祿は俸祿を求むるなり。『論語』に、子張學二干祿一の語あり。我が同遊の友は干祿の人にはあらず。而して我が賓は皆是れ飡霞卽ち塵外を求むるの人なり。浩歌は、『楚辭』に望二美人一兮不レ來。臨レ風恍而浩歌とあり。大聲に歌ふなり。長

嘯は、三國の諸葛亮は膝を抱いて長嘯し、晉の阮籍は蘇門山に於て長嘯する。皆是れ一種慷慨の氣味あり。今の浩歌長嘯は慷慨にはあらず、但水と山とに對し、氣を吐くのみ。梁前、山中に閣か又は堂か有るべし。然らずんば梁の有る筈無し。峽上、山際に於て吹く所の簧聲は、頗る新聲を爲す、猶未遊は誤寫なるべし、意義貫通せず。

從三位中納言丹墀眞人廣成　三首

五言遊吉野川

山水隨レ臨賞
巖谿逐レ望新
朝著二度レ峯翼一
夕翫レ躍レ潭鱗
放曠多二出趣一
超然少二俗塵一
栖二心佳野域一
尋二美稻津一

山と水と巖と谿との四、對として當然なるに、或は上は二物、下は一物なる句を作る者あり、そは對とならず。此の篇誤らず。朝著は、先哲曰く、朝看の誤ならんと。著は字として妙、意義を闕く。看は字として平凡、而かも字義は存す。朝には飛鳥を看、夕には游魚を翫ぶ。放曠、超然、山中に放曠、世外に超然。佳野は作者の造語か、或は古よりの成語か未考。美稻津は前は出てた通り傳說中の人。

七言吉野之作

高嶺嵯峨多二奇勢一
長河渺漫作二廻流一
鍾池超澤豈凡類
美稻逢レ仙月冰洲

一一解釋するの要を見ず、游目直ちに賦し、所謂拙速なるもの是れなり、古溪案ず鍾池と超潭と月冰洲。共に芳野の名所ならん。

五言述懷

少(ワカカリシトキク)無二螢雪ノ志一
長無(シ)二錦綺ノ工一
適(マ)逢二文酒ノ會(ニ)一
終恧(ハヅ)二不才ノ風(ヲ)一

螢雪の志無く、錦綺の工無きも、從三位中納言と爲る。皇恩大なりと謂ふべし。

従五位下鑄錢長官高向朝臣諸足　一首

五言従二駕吉野宮一

在昔釣レ魚ヲ士
方ニ今留レ鳳ヲ公
彈レ琴與レ仙戲レ
投レ江ニ將レ神通ス
柘歌泛二寒渚一ニ
霞景飄二秋風一ニ
誰カ謂フ姑射ノ嶺
駐レ蹕ヲ望二仙宮一

不レ得レ已ヤムヲして作る所の詩、大底此の如し。起句より結句に至る、何事を敍べんと欲する意なるやを知らず。余豈好んで先賢を罵らんや。後賢の爲め、又不得已なり。

釋道慈　二首

釋道慈者俗姓額田氏。添下人。少而出家。聽敏好學。英材明悟。爲衆所歡。太寶元年。遣學唐國。歷訪明哲。留連講肆。妙通三藏之玄宗。廣談五明之微旨。時唐簡于國中義學高僧一百人。請入宮中。令講仁王般若。法師學業穎秀。預入選中。唐王憐其遠學。特加優賞。遊學西土。十有六歲。養老二年。歸來本國。帝嘉之。拜僧綱律師。性甚骨鯁。爲時不容。解任歸遊山野。時出京師。造大安寺。年七十餘。

添下は大和國なり。太寶元年は、文武天皇の治なり。唐は中宗の嗣聖十八年とす。三藏は經義と律藏と論藏となり。玄宗は幽玄なる宗趣に通ずる。五明は聲明【訓詁】と醫方【咒藥】と因明【考定邪正】と工巧【伎曆】と內明【究五乘】となり。微旨は玄旨と義同じ。義學、今日の哲學の意義。請入宮中、天子は誰なるを明らかにせざるも、恐くば中宗の時ならん。仁王般若は經名なり。放光般若經、道行般若經、小品般若經、大品般若經、金剛般若經、光讚般若經、及び仁王般若經、なぞと種種あるが、要するに『大般若經』六百卷の一部分に過ぎざるなり。全く別種の經にはあらず。仁王、卽ち佛法を國王に付屬し、國王は之を以て民を治め、國に災なからしむとの意義を多く示してある所より、仁王般若品を特に天子は喜ぶなり。支那も日本も昔は皆同じ、法師は宮中に此の一品を講じたるものなり。養老二年に歸朝すとなれば、入唐當時より加算すれば十八年間なり、日本は元正女帝、支那は玄宗の開元六年に當る。帝嘉之、元正女帝、僧綱律師、僧綱は所謂僧徒の作業を監視して、賞罰を下すの役。骨鯁、柔和の反對、造大安寺、古訓に造を「イタル」とせり、大に誤る、建造にて「ツクル」なり。『續日本紀十五』及『元亨釋書二』に據て聊か附加すべし。法師養老元年に歸朝し、盛んに空宗を唱ふ。【「三論宗」を以て空宗と爲す。】天平九年【聖武天皇】十月に最勝會を大極殿に啓く。法師を以て講師と爲す。天皇、大官寺【大安寺是也】を新造せんとす。法師

支那の西明寺圖を獻ず。是に於て法師を以て造寺監護として居らしむ。天皇又詔を下して曰く、法師遠渉蒼波。覈異聞於絶域。遐游赤縣。研妙機於碩師。參跡象龍。振英秦漢。戒珠如滿月。慧水似巨瀛。宜施食封五十戸。十六年十月滅す。年七十餘なり。

五言在唐奉本國皇太子

三寶持聖德
百靈扶仙壽
壽共日月長
德與天地久

道慈が在唐の時、日本の皇太子とすれば、文武天皇が珂瑠と稱する時代なり。聖武帝にはあらず。三寶は佛寶と法寶と僧寶となり。持は護持と成語して、聖德を失墜せず、其の光を增すことを勤む。百靈は何でも通ずる、百神の意義と知れ。一日も太子の長壽ならんことを扶翼する、而して壽と德との長久を日月の如く、天地の如くならんことを祈るとなり。

壽德の二字を表はさん爲め、他の文字は其の注脚と見るべし。平語にして、而かも又重き所あり。諸家に勝ること數等なり。

五言初春在竹溪山寺於長王宅宴追致辭幷序

沙門道慈啓。以今月二十四日。濫蒙抽引。追預嘉會。奉旨驚惶不知攸措。道慈少年落飾。常住釋門。至於屬詞吐談。元來未達。況乎道機俗情全有異。香盞酒盃又不同。此庸才赴彼高會。理乖於事。事迫於心。若夫魚麻易處。方圓改質。恐失養性之宜。乖任物之用。撫躬之驚。不遑啓處。謹裁以韻以辭高席。謹至以下左。羞穢耳目。

竹溪山寺は竹林院ならん。吉野に在り。昔は法相、今は天台。身竹溪に在りし時、長王に招かれしものゝ如し。禮として此の詩を贈る。啓は白と同じ。濫蒙は、招かるゝ資格無きに招かるゝを謝する謙辭とす。落飾は、出家の日、頭髪を剪取するなり。屬詞吐談は、詞文も屬(ツク)る能はず、談論も卑下なりとの謙辭なり。道機は出家の機、俗情は普通人の情。香盞は茗茶の類、是れは道機のもの飲む所、酒盃是れは俗人の飲む所。理は道機、事は俗情。魚麻は不同、方圓も不同。魚の分へ麻を移し、麻の分へ魚を移す、方を圓へ移し、圓を方へ移す。物各の其の本質と本處とを失ふ。物は物の用なく、性は性の用を失す。撫躬、自分で自分を撫して、以て驚き(ウレ)ふ。不遑啓處、何事を敍して可なるや、其の辭を考ふる遑なきなり。

緇素杳然別(トシテル)
金漆諒(ニ)難(レ)同(シ)
衲衣蔽(ヒ)寒體(ヲ)
綴鉢足(ニ)飢(ル)嚨
結(テ)蘿(ヲ)爲(シ)垂幕(ト)
枕(レ)石(ニシテヲ)臥(ス)巖中(ニ)
抽(テ)身(ヲ)離(レ)俗累(ヲ)
滌(テ)心(ヲ)守(ル)眞空(ヲ)
策(テ)杖(ヲ)登(リ)峻嶺(ニ)
披(テ)襟(ヲ)禀(ク)和風(ヲ)
桃花雪冷冷(タリ)
竹溪山冲冲(タリ)
驚(テ)春(ニ)柳雖(レ)變(スト)
餘寒在(リ)單躬(ニ)
僧(ハ)既(ニ)方外(ノ)士

何煩入二宴宮一

詩に由つて之を案ずれば宴に招かれて之かずして辭謝するなり。題目が判然せざるゆえ、誤り易し。緇は僧人、素は在家人。杳に道が別なり。金と漆とは同じからず、誰か金、誰か漆と分つにあらず、違ふことを云ふため此の譬喩を以てす。衲衣、僧衣を衲衣と云ふに、種種の說あり。專門に屬する說は今略し、其の要を記せば、人の弃て顧ざる布を拾ひ來て、洗ふて以て之を製す。故に衲衣と名く、其の作製の法も『十誦律』に衲衣不レ貼二田相一。不レ許三披入二聚落一と。蔽寒體、衲衣を衣るは唯寒を蔽ふが爲なり。身を飾る爲にはあらず。綴鉢、僧徒の用ふる鉢は鐵鉢と瓦鉢とのみ、木鉢を用ふるは佛製にあらず。然らば綴鉢とは何ぞ、『四分律戒本』に、此丘蓄レ鉢。減二五綴不レ漏。鐵鉢に破目の生じたる場合は、其の破目を釘留にするを綴鉢と云ふ。嚨は喉「ノド」なり。飢ては道を學ぶ能はず。食を綴鉢に求め、唯飢を救ふのみなり。結蘿は、坐する處の幕に當れば足る。枕石、金臺銀閣は佛徒の臥す處にあらず。巖中に臥す是れ本分なり。抽身、語として聊か傲慢なれども不得已ならん。守眞空、三論は空宗にて、現前を總て空と觀ずるなり。策杖して嶺に登るは、王公の玉樓に登るより貴し。故に披襟して和風を禀くるなり。王公の玉樓、豈此の和風あらんや。山中も春なり、桃花を發く。而かも發く所、雪の冷冷たるあり。而して山は沖沖として深し。無情の柳も春の來るに驚くが如く、眉將に舒ひんとす。而かも早春は冬の餘寒が躬に逼るあり。僧は方外士なり。方內の士、所謂孔子の徒にあらず。殷勤の招致なるも、我は辭退して出席せずとなり。

昔し晉の惠遠は、「沙門不拜王者論」を草し、眼中王公無し。又道慈より三百年も後、支那に惟政法師あり、辭二侍郎蔣公燕一レ客見一レ招の詩に、昨日會將二今日一期。出レ門倚レ杖又思惟。爲レ僧只合レ居二巖谷一。國士筵中甚不レ宜。嗚乎是れ眞の法師なり、眞の佛徒なり。